

「死刑への計略」

2014年11月14日

マルコによる福音書 14 章 1 節～2 節。さて、過越祭と除酵祭の二日前になった。祭司長たちや律法学者たちは、なんとか計略を用いてイエスを捕らえて殺そうと考えていた。彼らは、「民衆が騒ぎだすといけないから、祭りの間はやめておこう」と言っていた。

主イエスは、ガリラヤでの「神の国」の宣教において、律法の下で「罪びと」とされ、社会的に排除された人々を愛し、彼らの生を神の名において是認し、「生きよ」と具体的な恵みを現された。それは、エルサレム神殿当局が作りあげてきた律法体系を壊すことであったので、彼らは主イエスを危険人物として命を狙うようになった。イスラエル最大の祭の「過越し」が近づき、主イエスと弟子たちの一行はエルサレムに上った。ろばの子に乗って入城する主イエスを群衆はメシアが到来したかのような歓喜をもって迎えた。神殿当局には苦々しいことであった。翌日、境内の「アンナス広場」で、献げ物売る商人たちの台や腰掛をひっくり返し、祈りの家を強盗の巣にしてしまったと言い、神殿当局の暴利をむさぼる姿勢に対し、暴力的な抗議を表した。彼らのメンツは丸つぶれであった。そこで、言葉をもって陥れようと論争を仕掛けたが、ことごとく論破された。群衆は、主イエスの言動を支持し、賛意を表していた。神殿当局者たちの腸は煮えかえり、主イエスを殺す意思をさらに固め、計略をめぐらした。しかし、権威ある神殿当局も、群衆の主イエスへの支持と賛意を無視することはできなかった。「民衆が騒ぎだすといけないから、祭りの間はやめておこう」と、死刑に持ち込む時機を計っていた。主イエスと神殿当局の間には、抜き差しならない緊張が張りつめていた。

インパクト出版社から、今年の 10 月に『極限の表現 死刑囚が描く 年報・死刑廃止 2013』が出されている。死刑に関することが書かれた重い本である。現在、日本には 130 名くらいの死刑囚がいる。彼らは外が見えない 3 畳くらいの独房に閉じ込められ、家族、弁護士以外との交流は許されていない。手紙も自由に書けない。長期の拘禁と恐怖によって正気を失った人もいるが、執行の時に怯え、戦々恐々の日々を送っている。彼らの日常は、想像を超える。しかし、生きてるので自分の思いを表現したい。彼らが獄中で描いた画の展覧会が開かれ、大きな反響があったそうである。まさに、極限の中での自己表現である。画だけでなく、短歌、俳句、小説なども掲載されている。死を見据えたところから発する一つひとつの言葉の重みに圧倒される。彼らの弁護に関わった弁護士たちの裁判報告と講演が記され、死刑に関する映画、演劇も紹介されている。そして、世界の死刑制度が報告されている。その全ては、当然ながら死刑廃止に向かって論じられている。

死刑は国家権力による殺人である。「冤罪」があるので、死刑を廃止しようという主張があるが、国家と言えども、人を殺す権利はないというのが廃止論者の根本的主張である。現在、世界の死刑廃止国は 140 ヶ国、存置国は 58 ヶ国で、存置国でも、過去 10 年間に、35 ヶ国が死刑を執行していない。執行国は 1 割強である。日本は死刑に関しては後進国である。死刑はもちろん犯罪に対する刑罰であるが、生きて、罪を償うことがより大切ではないか。そして、彼らの声が犯罪防止につながる。死刑には大きな費用がかかり、終身刑の方が安価だそうである。人権論から、死刑廃止に向かって世論を高めていくべきである。

主イエスは神殿当局によって「冒瀆罪」による死刑が宣告され、ローマの総督ピラトによって執行された。聖書は死刑を容認している。今日、聖書を超えなければならない。